短編小説『春の陰影』一考

経営学部
山田　晶子

文学作品においてはその題名が主題と深く関わっていることは言うまでもないであろう。特に言葉のイメジャリやシンボルが作品の主題を考える上で重要とされる作家の場合は、題名を深く考察する必要がある。一つの言葉が重層的な意味を持っているからである。

『息子と恋人』、『虹』『恋する女たち』、『羽鱗の蛇』、『チャタレー卿夫人の恋人』等の傑作の作者として有名なD.H.ロレンス（1885～1930）も、またそういうタイプの作家である。筆者は、以前に執筆した論文「『越境者』におけるロレンスの倫理観」(『ロレンス研究――『越境者』――』(D.H.ロレンス研究会偏：朝日出版社、2003)）において、原作の題名 *The Trespasser* の意味を考察した。この題名には、多くの日本人研究者が様々な訳を付けているのである。ロレンス研究会では「越境者」と訳すことで意見がまとまったが、筆者は自分でこの作品を翻訳して出版したときに「不倫」と訳した。前述の論文は、なぜこのような題名の訳にしたかということを論じたものである。他にも「侵入者」、「罪びと」、「侵犯者」等の訳がある。このような作品の題名の多様性は、訳者がその作品をどのように解釈しているか、ということと関わっている。そして傑作と言われる作品ほど多くの複数の解釈が可能なのである。ゆえにロレンス一つの作品は常に複数の解釈がなされ、それゆえに読み解くのが難しいし、また面白いのである。

以上の観点から、ロレンスの短編小説の代表作の一つと言われている『春の陰影』（*The Shades of Spring*）について、その題名の意味を考えてみようと思う。この短編は、1911年12月に『悩める天使』という題名で書かれ、その後1912年３月に書き直されて雑誌 *Forum*（1913年３月発表）と *Blue Review*（1913年５月発表）に元の題名とは違った『汚れたバラ』という題名で掲載された。そして1914年に、最終的に『春の陰影』という題名に変更されたのである。

さて、“shade” という単語には多くの意味があり、名詞の意味を辞書で見ると全部で18の意味が載っている（*Shougakukan Random House English-Japanese Dictionary*）。“the” を冠して①陰、物陰、②日陰という意味で使われるのはよく知られている。一方で、あまり知られていないのが⑧の亡霊、幽霊（specter, ghost）（これは文語である）、や⑨死霊：黄泉（Hades）の国の住人（ギリシア・ローマ神話）や、⑱ “the shades” として死者の霊の住処としての黄泉の国（Hades）である。これまで読んだ『春の陰影』論においては、これらあまり知られていない “shade” の意味に言及したものがないのであるが、筆者にはこれら⑧、⑨、⑱の意味がこの短編の解釈に重要であると思われる。

『春の陰影』と訳すとき、春は万物の生命が蘇えり明るいというイメージを抱かせるが、その明るさに何らかの陰り（比喩的なもの）が差しているというように受け取られるであろう。これはこの短編の主人公の一人であるサイソンという男性の視点から物事を眺めたときにはそのように捉えられると思われる。サイソンは29歳の男性であり、17歳のときに故郷の田園（ロレンスの故郷であるイーストウッドの近くのアンダーウッドがモデルとなっている）を捨てて、都会へ出、ケンブリッジ大学で教育を受けて社会的に高い地位を得たのだが、12年経ってから故郷へ戻ってくる。彼はすでに結婚したのだが、17歳の頃に付き合っていた女性ヒルダのことを今なお想っており、手紙や本を送っていた。サイソンが春に故郷へ戻ってきたとき、田園地帯の森の春が溢れんばかりの色合いで美しく描写されている。この田園の春の美しさ

にサイソンは何度も感動していることが述べられる。そう、工業化によって汚された都会に長らく住んでいたサイソンにとって、この森や林や花や木々や小川や動物や小鳥たちのいる（ある）所は、まさに楽園なのである。しかしそこは彼にとっては一種の禁断の場所である。彼は「侵入者」として描写され、森の小道を通ろうとすると森を守っている森番に威嚇され、阻止される。しかし結局は彼は森の小道を通っていって、ヒルダに出会う。森番のアーサー・ピルビームは、現在はヒルダの恋人であり二人は深い関係になっていて、いずれ結婚する予定なのであった。ヒルダの住んでいる家へ行くには森を抜けて行くのが早道なのであるが、そこにはアーサーがいてすんなりとは通ることができなかったのである。森には桜草やヒアシンスを初めとして様々な春の花が咲き乱れているのであるが、中でも見事な描写をされているのがブルーベルである。森一面に咲き誇るブルーベルは青い河であるかのように、洪水となって森に溢れている。そこに緑色の道が一本走り、曲がりくねっていて、サイソンは何度も立ち止まっては美しい光景にため息をつく。死者が死んだとき三途の河を渡らねばならないが、サイソンはブルーベルという美の河を渡ることになるのであり、渡し守はアーサーなのである。そして渡った先には黄泉の国があるのだが、これは「地獄」ではなくて「楽園」である。サイソンはそこでは亡霊である。原文ではサイソンのことを「死んだような青白い光を放つ」顔をしていると書いている個所があるし、また彼にとってこの楽園が「地獄のよう」であるとも書かれているので、題名の “The Shades” と言う言葉は、まさに⑧、⑨、⑱の意味を兼ねていると考えて良いであろう。サイソンは、その黄泉の国で、昔とは違って女らしくなったヒルダに出会う。彼女は、今はサイソンではなくてアーサーを愛している。彼女は性的な魅力に溢れ、この楽園の女王であるかのようである。そして森番アーサーは、『白孔雀』や『チャタレー卿夫人の恋人』に登場する森番と同じく、都会的な存在には嫌悪を示すのである。サイソンは、この黄泉の国（楽園）では異邦人である。

以上のように *The Shades of Spring* という題名には、ロレンスが他の多くの作品でも書き続けてきた野生的な男性の肯定と、都会的なことに価値を求める男性に対する批判という主題が込められているのである。言葉の意味を慎重に考察したとき、一見すると否定的に思われる題名が、実は肯定的な意味を背後に含んでいるということに、読者は驚嘆し喜ぶであろう。そしてロレンスがどんなに言葉使いに繊細で慎重な作家であったかを悟るであろう。

語学の季節

法学部
鈴木　清貴

信じてもらえないかもしれないが、大学院生だった頃、六法より外国語の辞書を開いている時間のほうが、間違いなく長かった。周りの院生も似たり寄ったりの状況で、だから、本がばらばらになってしまうほど辞書を引き、辞書を何冊つぶして、何回買い換えたかが、院生たちのひそやかな矜持となるような時代だった。いまの法科大学院はまだなくて、あるのは法学研究科だけだったときのことである。

語学にそれまで意識を向けてこなかった平均的な法学部生（私）が、法学研究科に入り、語学の風に、ときに嵐のように強く、吹かれることになった時の話をしよう。加藤登紀子さんの『時には昔の話を』の旋律に乗せたつもりで、いくつかのエピソードを語ろう。

＊